

恐怖体験時の人間心理と行動

Human psychology and action at the time of fear experience

1K08A043-4

大瀧 有輝

指導教員 主査 山崎勝男 先生

副査 葛西順一 先生

【序章】

あなたが「恐怖」を感じるのはどういう時だろうか。人によって個人差はあるだろうが、その最もたるものは「死」に対する恐怖だと思われる。今年発生した「東日本大震災」は多くの人を恐怖に陥れた。このような大災害時に人間がどのように考え、行動していくのだろうか。

私はこの度の震災を受けて、恐怖体験時の人間心理と行動に興味を持った。さらに今後の生活に生かしていけるのではないかと考え、本研究を行うことに決めた。

【第1章 災害時の人間心理】

まずは、今回の震災での私自身の体験を振り返る。恐怖を感じていなかったわけではないが、根拠の無い安心感があった。その要因を自分なりに分析すると、すぐさま命の危険になるものがなかったという点と、今まで大きな地震を経験したことがなかったという点が挙げられる。その後しばらく余震に怯える日々が続いたが、いつしかその生活にも慣れていき、春休みが終わる頃にはすっかり回復していた。

私たちは災害に合った時、茫然自失から驚愕状態、そして虚脱状態、さらに災害後のユートピアというプロセスを辿る。虚脱状態は最低レベルの適応行動であり、危険に対して致命的になりかねない。虚脱状態になりやすい人には3つのタイプがあることを説明する。

災害時に身を守らず、心に余裕があるかのような行動をする人がある。私たち現代人は危険に対してひどく鈍感にできているため、とっさに避難することができないのだ。この心のメカニズムを「正常性バイアス」と呼ぶ。

正常性バイアスの例として長崎豪雨水害を挙げて説明する。被災者は自分が被害に合うまで危険を認識することができず、その結果命を落としてしまうケースがある。

次に、3つのデータを用いてリスクに対する自己判断について考える。

さらに、過去に災害経験を持つ人が災害に出合った場合、その経験がどう反映されるかについて説明する。

災害に合った時、身体が動かなくなってしまう「凍り

つき症候群」や、生存への強い意志が命を救う可能性があるあるということを紹介する。

【第2章 パニックと群衆の心理】

災害時にパニックが起きると思っている人が多いが、実際にはパニックが起こることは稀である。「パニック神話」はパニックという言葉の解釈のズレによって生まれる。ここでは専門家と一般人が考えるパニックの定義についてそれぞれ説明する。さらに起こることが稀だと言ったパニックが起きる4つの条件についても説明する。パニックを防ぐためにはこの4つの条件を成立させない必要がある。

「エリート・パニック」の項では人々がパニックになるのを防ごうという意識が逆に不安を煽る結果となることを説明する。情報を隠し、過小に公表する政府に対して国民からの信頼が低くなってきている。

続いて人間の心理や行動を集団という形で考えていく。1人での時は正常であっても、「群衆」と化した人々は利己的で、非合理的な行動をとることになる

この章の最後に、「買い溜め」行動が起きる原因について考察した。

【第3章 災害時のデマ】

災害時にデマが飛び交うことがよくある。この章ではなぜデマは発生するのかを考える。その原因として、情報不足が挙げられる。情報不足は人々に不安を抱かせ、その不安を和らげるために自ら「虚構」を作り出してしまふのである。この度の「東日本大震災」でも多くのデマが飛び交った。ツイッターなどデマが広がりやすい現代において、私たちはどのように対応していくべきなのかを考える。

【終章】

本研究から私たち人間が災害に対してあまりに無防備であることが明らかになった。「正常性バイアス」のジレンマを乗り越えて、自身の命を守っていかなければいけないのだ。災害から身を守るために、日頃から心構えをしておくことが大切である。